

しらぬい くま

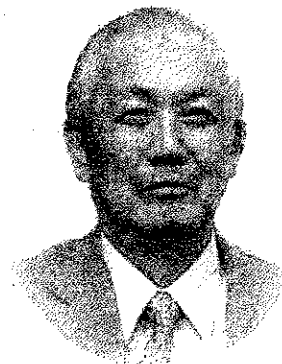
創刊号

目次

- 会長挨拶 大和田統一
- 第2回見学会のお知らせ
- 巻頭エッセイ 住吉献太郎
- 18年度総会報告/18年度予算
- 理事会・事務局の活動の経緯
- 総会前日現地見学会報告 前田一洋
- 研究発表会
- 日本一(たぶん)の規模の森づくりに参加しませんか 沢畑亨
- 会員からのニュース
- 八代の未来を育む博物館でありたい! 石原浩
- 俳諧の礎を生んだ八代/菓井信恒
- 球磨川のツクシイバラ/小川香

会長挨拶

熊本県立大学環境共生学部長・教授
大和田統一



昨年10月の本学会設立総会で会長に選出されました。大和田でございます。その後、今年5月には多良木町地域交流館「石倉」で第1回総会と研究発表会を開催し、またその前日には第1回現地見学会として「市房の千年杉と奥球磨の信仰の郷へ」が行われ、まずは学会としての活動がスタートしました。

学会設立の準備の過程では、「青の革命」研究グループや「四万十・流域圏学会」などからいろいろとアドバイスやご援助を頂いたことを心から御礼を申し上げます。

森・川・海のつながりを流域圏として捉え、さまざまな研究や情報を共有することにより、この地域の環境保全や持続的な利用を図ること、さらにはそれぞれの地域で生まれ、継承されてきた文化や文化遺産を共有していくといった人文・社会的な取組も重要な活動としていきたいと存じます。私たちの学会は、球磨川流域のみならず、不知火海(八代海)を囲む広い地域を含んだ、これまでにはなかったユニークな学会として発展していくことを切に望みます。

このたびは、ニュースレターが刊行されましたが、私たちの活動についてはニュースレターを年2回と不知火海・球磨川流域圏学会誌を1回の刊行、また総会と研究発表会を年1回および現地見学会を2回の開催などを考えています。関係者の皆様にはこの活動のための努力をお願い致しますが、また会員の皆様にも積極的な参加をお願い致します。

TEL&FAX: 0964-26-2003

事務局

熊本県下益城郡城南町東阿高1136-1

The Japanese Society of Shiranuiikai & Kumagawa Regional Studies

「尺鮎」を釣った鳥飼義治さんのこと

住吉献太郎

鮎釣り歴9年の鳥飼さんは、もとは主にヤマメ釣りをしていた。ヤマメはH8年に、39.5cmで625gの大物を釣ったことがある。鳥飼さんの今回の尺鮎は、この時期にはなかなか釣れないもので、二年ものといわれるものである。普通には尺鮎は8月頃になって釣れるので（この頃までに育つ）、特に珍しいといわれる所以である。

鮎釣りのポイントは、まず川の様子を見ること、特に水中の石に餌の苔を削ぎとった跡があることが大切で、これが鮎のいる証拠となる。この点では川によく出かけて川を知っておくことが大切となる。

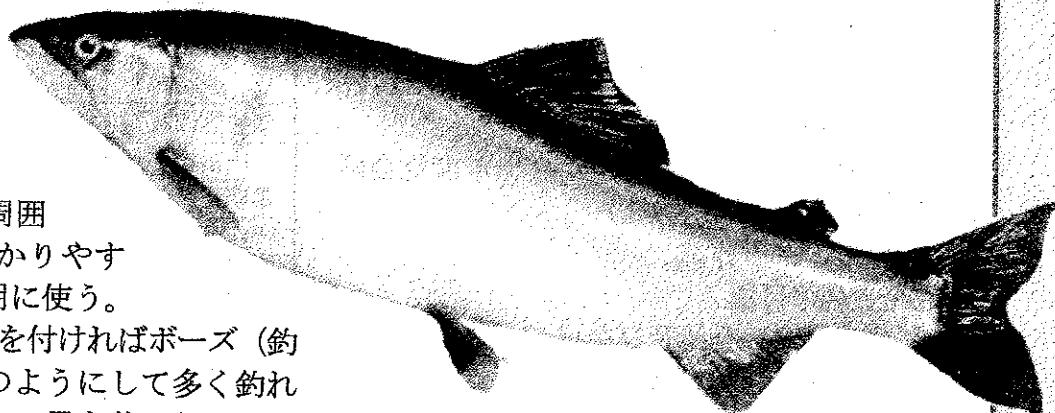
友釣りの鮎は、まずは養殖鮎を使うからなるべく早く一番目の鮎を釣りあげること。これは天然物の鮎であるから、動きが早く周囲の鮎と競合し鮎が掛かりやすいので、次の友釣り用に使う。

このようなことに気を付ければポーズ（釣果ゼロ）がない。このようにして多く釣れた日には、午後だけで50尾を釣ったこともある。尺鮎に近いサイズの鮎は、場所によってはかなり居る。

鳥飼さんには、特に素晴らしい特技がある。自分用の「タモ」（たも網ともいい、釣れた鮎を引き寄せて掬う魚掬い網）を工芸品仕立てにつくるのである。その「タモ」

の輪と柄になる部分は榿（カヤ）であるがその主材の間に模様のきれいな樺や楓の材料を挟み込み、つやを出してある。玄関にでも飾りたいような作品に仕立ててあり、立派な工芸品の「タモ」が数本作られていた。まさに釣道精神なのか。その心意気につくづく感じ入った次第である。

このようになれば、尺鮎も自然に釣れるような技が備わるのであろう。



※鳥飼さんが尺鮎を釣った記事が、平成18年6月9日（金）に掲載されています。

住吉献太郎/Kentaro Sumiyoshi
熊本県文化財保護員、たらぎ石倉研究会会長、郷土史研究家、日本地名研究会

18年度総会が開催されました

開催日時 平成18年5月14日(日) 11:00 開催

開催場所 地域交流館石倉(熊本県球磨郡多良木町)

出席者 出席者34名、委任状8名

- 1) 開会の挨拶 佐藤伸二事務局長
- 2) 会長挨拶 大和田紘一
(要約) 八代海沿岸・球磨川流域とフィールドも広く、ユニークな学会になっていくことと思う。学会の趣旨・目的に沿って、八代不知火の人たちも一緒に、昔からの文化、文化財や歴史を共有していくことが大事ではないかと思う。

3) 議事 議長:時松雅史

■平成18年度事業計画

- ①平成18年度総会開催/5月14日(日)多良木町地域交流館・石倉
- ②研究発表会/5月14日(日)多良木町地域交流館・石倉
- ③地域見学会/5月14日(日)「球磨川清流の自然と文化を探る」・8月24日(木)佐敷城跡と葦北アマモ場
- ④ニュースレター発行/年2回(平成18年7月、平成19年2月発行予定)
- ⑤学会誌発行/1年に1回(平成19年度総会開催前を発行予定とする)
- ⑥ホームページ作成
- ⑦その他の目標
 - ・学会員内の交流及びネットワークづくり
 - ・他学会及び他団体との交流

■平成18年度予算

総会において提出された予算案は、会費収入を会員を100名と予想して、予算を立てましたが、審議の結果、当日確認された会員数66名を元に、予算を建て直すことになりました。総会の決定を受け、理事会で承認されたものを報告としています。

平成18年度予算

(収入の部)

名目	内容・備考	金額
個人会費	3000円×66名	198,000
団体会員	10,000円×0	0
雑収入		50,000
計		248,000

(支出の部)

名目	内容・備考	金額
郵便代	[(80×4)+50]×66 ニュースレター、学会誌、返信ハガキ	24,420
学会誌作成費		130,000
ニュースレター作成	2回/年	20,000
事務経費		30,000
HP作成費		10,000
運賃・郵送費		10,000
会場費	総会、研究発表会、会議等	10,000
予備費		13,580
計		248,000



地域交流館石倉(多良木町)



大和田会長の挨拶

■その他：会員の入会について

会員資格については、会則第7条に「会員となろうとするものは入会申込書を提出し、理事会の承認を得なければならない」とあり、その細則については、内規を設けることに決定。内容については理事会に一任するものとする。次の入会手続きに関する内規は6月7日開催理事会において、内容を決定したものです。

■学会の入会手続きに関する内規

1. 本内規は、学会会則第7条に定める会員の入会手続きを円滑に進めるために学会の会則第30条に定める、学会の運営に関し必要な事項として定めるものである。
2. 学会会則第7条に定める入会申込書の書式は、理事会で定めたものを使用する。書式の変更には理事会の承認を必要とする。
3. 前項で定めた入会申込書が提出された日から、次の理事会の開催まで2週間以上の期間がある場合、理事会は申込書提出人の入会を承認する権限を事務局長に委任することができる。
4. 事務局長は、理事会から前項で定めた権限の委任を受けた場合は、当該入会申込書が提出された日から2週間以内に申込書提出人の入会の承認または不承認の判断を行い、その結果を申込人に連絡することとする。
5. 学会会則第9条に定める役員については、役員就任が決定された時点で、入会申込書の提出及び理事会の承認がされたものとみなす。この場合、役員は速やかに会則第4条で定める会費を支払って会員とならなければならない。
6. 本内規は、平成18年6月7日から適用する。

■理事会・事務局の活動報告

- | | |
|--------------|---------------------------|
| H17/10/29(土) | 設立総会
/八代市パトリア千丁 |
| 12/19(月) | 第1回理事会/八代市 |
| H18/ 2/ 5(日) | 総会準備会議/人吉市 |
| 17(金) | 現地見学会
現地スタッフ会議/人吉市 |
| 3/22(水) | 総会準備会議/八代市 |
| 4/ 5(水) | 第2回理事会/八代市 |
| 23(日) | 総会準備会議/多良木町 |
| 5/ 2(火) | 総会準備会議/八代市 |
| 9(火) | 現地見学会
現地スタッフ会議/人吉市 |
| 13(土) | 第1回現地見学会
及び交流会 |
| 14(日) | 平成18年度総会
/多良木町地域交流館・石倉 |
| 6/ 7(水) | 第3回理事会/八代市 |

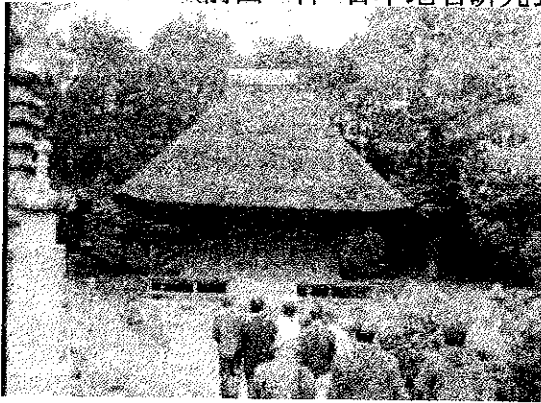
第1回現地見学会・研究発表会

■現地見学会

5月13日(土)雨。午後1時、多良木駅前に集合し、味岡建設のバスに乗車。案内は多良木町の住吉献太郎。まずは、黒肥地、清連寺へ赴き、阿弥陀堂の内外を拝観。次いで水上村の猫寺観音堂。新住職のご好意で堂内も拝観ができた。最終目的地は市房千年杉。多良木町の合志洋一さんの解説で、市房山の意義、林業の現状等、十分に理解することができた。千年杉の根元にギンリョウソウを見付け、一行の喜びも一入ではなかった。

5月14日(日)曇。湯楽里(ゆらり)を9時に出発。案内は人吉市の前田一洋。同バスで、湯前町城泉寺境内の石塔や佛堂、そして内陣の阿弥陀三尊に参拝。次いで、妙見野。天候も晴れ、球磨盆地を十分俯瞰できた。太田家(国指定重文)を見学した後、多良木石倉の会場に正午ごろ到着した。

(前田一洋・日本地名研究会)



明導寺阿弥陀堂(1230年)国指定/球磨郡湯前町

■不知火海・球磨川流域学会研究発表会

研究発表会には約100名の方々が参加され、地域の歴史を踏まえた人と自然の共存のあり方などが報告され、充実した内容でした。球磨焼酎の試飲や地元料理でのもてなしなどもあってローカル色豊かな本学会にふさわしい内容でした。

○開催日時 平成18年5月14日(日) 13:30
開催

○開催場所 地域交流館石倉
(熊本県球磨郡多良木町)

○基調講演「球磨の自然と文化財」
住吉献太郎(熊本県文化財保護指導員)

○研究発表・話題提供

①「農業政策と研究者の貢献」

新井祥穂(東京大学大学院総合分科研究科助手)

②流域で考える防災「土砂災害の警戒・避難」
小川 滋(福岡工業大学社会環境学部教授)

③相良村四浦の地域起し

前田博典(NPO 法人相良田舎館球磨・人吉ネットワーク)

④田森不二 森林不二

沢畑 亨(水俣愛林館館長)

⑤沿岸環境再生を願う地域活動～海藻の森作り～

森下惟一(みなまた環境テクノセンター環境技術アドバイザー)

⑥おわりに 川辺川沿いの縄文時代のムラ

佐藤伸二(八代工業高等専門学校教授)

沢畑さんの発表の様子



日本一(たぶん)の規模の森づくりに参加しませんか

沢畑 亨(水俣市久木野ふるさとセンター・愛林館館長)

森林の公益的機能(水源涵養・二酸化炭素吸収・景観・安らぎ・表土保全など)は、日本全体で年間70兆円、1ha当たりで279万円(林業白書による)ということです。

森林のうち41%(1千万ha)は人工林ですが、日本の林業にとって苦しい状況が久しく続いています。手入れの行き届いた人工林は、公益的機能は自然林と同様です。しかし、木材価格が15年前の半額になったため、経済合理性に任せていても手入れはされません。森林所有者の多くは、倫理感からお金をつぎ込んで除伐・間伐をしています。

森林の公益的機能を山村はこれまで無料で提供してきましたが、もはや支え切れません。そこで、熊本県でも昨年度から納税者一人あたり年間500円という「水とみどりの森づくり税」を徴収することとなりました。

県民の皆さんに広く応援してもらえることはいいことですが、皆さんは税金の使われる先の、森林実状はどの程度ご存じですか?木材を大量に使う生活や社会、木材の流通、都市生活のコスト、水の行方については?

こうした問題を考えるために、愛林館では「働くアウトドア」を毎年開催しています。

過去9年にボランティアの皆さんと植えて育てた森林は21ha(ボランティアとしてはたぶん日本一広いのでは?)となりました。

今年も、7月26日より開始。8月10日まで行う予定です。(半日の参加もOKです)

◇2006年「働くアウトドア」のご紹介◇

7/26(水) 18時30分愛林館集合

(鉄道の方は、水俣駅前発17時30分の「みなくるバス」でどうぞ)

- 27(木)炭焼き
- 28(金)炭焼き・時間があれば間伐
- 29(土)炭焼き・間伐
- 30(日)全休・競り舟大会に参加
- 31(月)下草刈り(全日)
- 8/ 1(火)下草刈り(全日)・
小宴・夜の照葉樹林観察
- 2(水)全休・そば打ち(午後)
- 3(木)下草刈り(全日)
- 4(金)下草刈り(全日)
- 5(土)炭出し・川で泳ぐ・豆腐作り
- 6(日)下草刈り(全日)
- 7(月)下草刈り(全日)
- 8(火)下草刈り(半日)・半休
- 9(水)下草刈り(半日)・
バーベキュー・たき火バウムクーヘン
- 10(木)解散

(天候などで変更することもあります)

- ★下草刈りとは、植えた苗の周囲の草を刈り、成長を助ける作業です。大きい鎌を使います。
- ★除伐とは、樹齢20年前後の桧の間引きです。鋸となたで桧を切り倒します。
- ★下草刈りも除伐も、体力は使いますが誰にでもできる仕事です。自分のペースで作業を行いますので、心配はご無用です。
- ★宴会のみの参加には手土産を大量にご持参ください。

● 宿 舎:水俣市久木野ふるさとセンター・愛林館

● 参加費: 無料(食事は参加者で当番を決め、自炊します。)

● 問い合わせ先:愛林館まで 郵便:〒867-0281 熊本県水俣市久木野1071

電話&FAX: 0966-69-0485/電子メール:airinkan@giga.ocn.ne.jpで

住所・電話番号・氏名・年齢・生年月日・性別・血液型・参加期間をお知らせください

● 協力:水俣市・水俣市久木野分収林造林組合・林野庁熊本南部森林管理署・久木野寄る会

6 会員からのニュース

学会メーリングリストでは、会員から地域の情報がたくさん寄せられています。このページでは、たくさんの情報の中から、厳選した情報を再録します。

★八代海のアサリ豊漁!

去年、一昨年と八代海のアサリは大変不漁で、八代市が依頼していた調査の報告に関する記事がありましたので、下に紹介します。しかし、今年は大変な豊漁のようで、連日干潟はアサリ掘りの市民でいっぱいのです。それも大きくて、大変肥えていておいしいです。

また、今年はうれしいことに、漁師さんも10年以上は見ただことがなく、絶滅したのではないかと言っていた「ウノカイ」について、私に伝わってくるところでも目撃情報が3件もあっています。1件は私も確認して、写真も取りました(ただ、標本にして残すより、お吸い物にして食べるほうを選択しましたが、とてもおいしかったです)。

ウノカイは、漁師や住民に「昔、一番たくさんいた貝は何ですか」と聞くと、まず真っ先にあがってくる名前です。その正体は「オノガイ」ですが、これを一度食べたいというのが、私の不知火海を取り戻したい動機だったので、最近では一番うれしいニュースでした。確かに、干潟を歩くと、ぬかっていた泥干潟に砂が多くなって歩きやすくなっています。荒瀬ダムが試験的にゲートを下げていることと関係があるかもしれません。

★「八代海のアサリ豊漁!」への反応

先日私が流した「八代海のアサリ」について、いろいろお問い合わせがありました。戴いたご意見は以下のようなものです。また、荒瀬ダム撤去に関する問い合わせもありました。荒瀬ダムに関する資料は下記より入手できます。

(企業局ホームページ>荒瀬ダム対策検討委員会)

<戴いた意見>

- アサリ豊漁の記事は、まだ中間報告の段階である。
- アサリ水揚げの阻害要因として淡水化が揚げられています。淡水の影響が全く無いところにはほとんどアサリ自体がないことも念頭に入れるべきです。現に淡水観測器が設置しており、その観測のもとアサリ阻害要因が低塩分であると判断した場所に、アサリが多く生息しています。

○このままでは、アサリはだめになると言われていたのに、今年は豊漁。アサリの生態はまだ分からないことだらけです。

○おかげさまで本年度はアサリが豊漁です。但し、本年漁獲できるというのは少なくとも1年半前に稚貝がそこに着底していなければなりませんので、そのときの海況及びそのときから現在までの海況がアサリにとって良好であったということでしょう。

○のりの色落ちに関係しています。のりの色が悪くなるのは栄養塩が足りないためです。その原因の大きなものとして、植物プランクトンが揚げられます。昨年から本年にかけて、この植物プランクトン量は、平年の数倍(5~6倍)の多さでした。

○お見ですが、食害種のツメタガイやキセフタガイはアサリより淡水に弱いようです。淡水被害に遭いながらも河口域にアサリが発生(人の見ただ目)するのは食害種からの被害が少なかった結果であることと、そこに多くの餌があったこととあり、この1年半はそのバランスが良かったということも豊漁の要因の一つと考えています。(つる詳子さん)

★水俣病50年「水俣への手紙」

今年、水俣病50年にあたり、様々な取り組みが行われていますが、50年経過してもなお、現在の問題であるのに、被害者は齢を重ねていきます。現在、熊日新聞では、水俣に関する皆様の思いやご意見「水俣への手紙」を募集して、連日紹介されています。今日までの「手紙」、及び水俣病に関する情報は熊日の下記より、読むことができます。

水俣病百科

<http://www.kumanichi.com/feature/minamata/>

(つる詳子さん)

学会MLへは、下記HPから入会可能です(要承認)

MLの過去ログへもアクセスできます

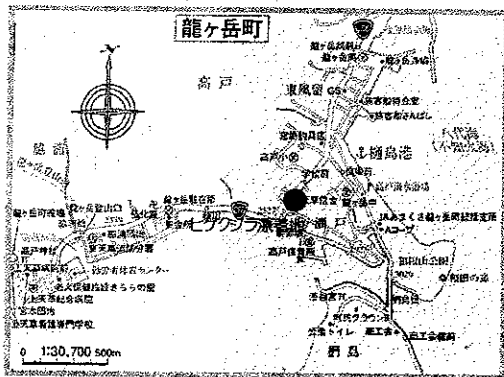
<https://mm.itc.u-tokyo.ac.jp/mailman/listinfo/shiranui-kumagawa>

★漂着クジラのその後

上天草市竜ヶ岳の海岸にクジラが漂着したことを、平成18年6月9日(金)の記事で知った。

やっと時間を見つけて、竜ヶ岳町まで行ってきた。土地の人々に話を聞いて、漂着地点を確認した。後日、上天草市役所に問い合わせ、クジラを知る事ができた。熊本市立博物館で骨格標本にされ、特別展示で一般に公開される。新聞記事にはヒゲクジラ亜目の「ナガスクジラ科の一種と見られる」とあるが、調査の結果、ニタリクジラと判明したとのことである。

(佐藤伸二さん)



★鮎全国的に低調

球磨川の場合は、河口から14kmのところ荒瀬ダムがあるので、翌年の鮎の遡上量は、ほぼ前年の台風状況に左右されると、漁師さんたちは口を揃えます。つまり、ダムより上流で孵化した仔魚は、短期間で海まで下ることが出来ず死んでしまうからです。

また、親も下ることができません。それで、大水の出たときのゲート開放時しか、下流に下るチャンスがないわけです。

その下流にも堰があるので、産卵場になる浅瀬がありません。去年も、もともと鮎が少なかったのに、なおさらです。それでも、5年ぐらい前は300~400万尾ぐらいの天然遡上がありましたので、球磨川の場合、やはり前年の落ち鮎時の出水が一番影響しているという漁師さんの経験測はあたっているような気がします。

(つる詳子さん)

■川の魅力とラフティング

街のそばを流れる川で、泳いで快適な一級河川が九州内にどれだけあるでしょうか?数十キロにわたり堰がなく、快適にカヌーで下れる川がどれだけあるでしょうか?

それらの点で球磨川は、九州内で特に個性的な特徴ある川だと思われます。

昨今<ラフティング>というゴムボートでの激流くだりが全国で人気ですが、九州内でラフティングが可能な川は唯一球磨川(水系)のみ。現在では人吉や球磨村を中心に11社ものラフティング会社が営業し、年間4万人が球磨川を体感しています。客層の中心は、福岡など都市部の20代~30代の若者であり、生まれて始めて川で泳ぐ方も多く、その自然の美しさや川の面白さに、年々ファンを増やしています。

一日ツアーの平均金額は1万円。球磨川には、遠方からわざわざお金をかけてやって来るだけの、大きな価値があるようです。また最近では、川の魅力に引き寄せられ、少しずつではありますが移住者が増えています。この川には、人に移住を決意させるほどの大きな魅力があるのです。

昨年、全ラフティング会社が集まり<球磨川ラフティング協議会>が発足しました。技術や安全性の向上、川の魅力拡大、社会貢献、更には修学旅行の受け入れ拡大など、更なる動きも始まっています。観光資源としての川の価値も益々高くなることでしょう。

故郷の自然や文化は、ありきたりの日常として目の前に横たわっています。しかし、外からの視線に接した時、突如としてその価値が輝き始める場合があります。

故郷の価値…。私たちが気づいていない<価値>がまだまだあるかもしれません。

(重松貴子さん)

★:メーリングリスト(ML)からの転載記事(転載許可済) ■:会員から寄せられた地域のニュース・コラム

地域のニュース原稿募集!

編集部では、ML記事の転載だけではなく、この欄への原稿も募集中です。

八代の未来を育む博物館でありたい！

石原 浩

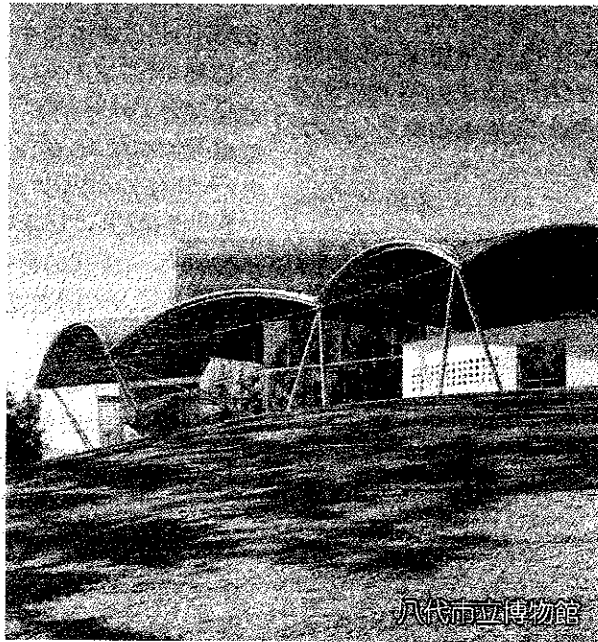
「やっちは、な一んもなか」時々耳にするこの言葉。教科書に見る華々しい事件や英雄伝の陰に地方の歴史や文化は埋もれがち、歴史の大部分は未だ謎であることをご存知でしょうか。

八代市立博物館未来の森ミュージアムは、八代地方の歴史と文化に関する資料を収集・保管・調査研究し、展覧会を通してその謎を解き明かす役目を担っています。秋季特別展「八代の歴史と文化シリーズ」は、八代の歴史と文化を全国の文化史に位置づけるもの。一見地味な展覧会と思われがちですが、図録や報告書にまとめた成果は次世代に引き継ぐ価値あるもの、八代の財産になると自負しています。

当館が力を入れている研究と展覧会の一部をご紹介します。八代の歴史と文化に多大な影響を与えた松井家。当家伝来の武家コレクションは、全国でも一級の美術品と膨大な古文書資料で構成されています。特に約6200余通に及ぶ古文書は、解読作業に30年の歳月が必要です。平成6年度から始まった調査については、現在まで10冊の報告書に2060通の解読文を紹介してきました。そこにはメジャーな歴史事件に関連する内容も含まれ、展覧会「関ヶ原合戦と九州の武将たち」(平成10年)「天草・島原の乱一

徳川幕府を震撼させた120日」(平成14年度)は、松井家文書の解読作業の成果から生まれたものでした。

近年は、麦島城の発掘が話題となりましたが、展覧会「麦島城の時代—400年の時をこえて」(平成16年度)に伴う文献調査の結果、九州初の



石垣を持つ平城・麦島城を築いた人物が小西作右衛門である事実が判明。さらには、豊臣秀吉の朝鮮侵略に伴い八代から出兵した武士は、部隊の最前線を担っていた事実も明らかになりました。これは、負の歴史と言えるかもしれませんが、輝かしい歴史を知る一方、負の歴史を認識することは、い

っそう重要なことだと思います。それを踏まえて、我々は初めてポジティブな未来を切り開くことができるのではないのでしょうか。

「調査研究」というものは、我々の仕事に限らず、大変地味で時間を要する作業です。しかし、この基礎作業を抜きにして、新たな真実は見えてきません。八代の過去を正しく認識し、八代の未来を皆が語りあえるよう、我々の仕事はその一助になることを願って、日々精進しています。

石原 浩/Hiroshi Ishihara 八代市立博物館学芸員

八代市立博物館未来の森ミュージアム <http://www.city.yatsushiro.kumamoto.jp/museum/>
1991年10月開館。1.独自の視点と調査にもとづく秋季特別展覧会「八代の歴史と文化」シリーズの開催、2.財団法人松井文庫所蔵品の調査・研究、展示、古文書調査報告書の刊行等、3.考古・歴史・民俗・美術工芸(八代焼、肥後鐺、染草、和紙など)の調査・研究、収集・展示を基本方針として運営。八代城下の森に溶け込む近代的な建物は、伊東豊雄の設計による。1993年、BCS賞(建築業協会賞)受賞。

球磨川のツクシイバラ

小川 香

俳諧の礎を生んだ八代

藁井信恒

近頃、八代の博物館で「宗因から芭蕉へ」という催し物があった。八代では初めて芭蕉の「ふる池や蛙飛び込む水の音」の短冊が展示されたのであるが、あの有名な句の直筆を間近に見て、感動した人は多かったのではなかろうか。芭蕉は有名だから親しみを感じるだろうけれど、一般の人は、さて宗因って誰ってことになる。その宗因は(1605～82)肥後熊本で生まれ、青年期を八代で過ごし、その後、関西で連歌師、俳諧師として活躍した。当時、全国的に人気があり、井原西鶴らを育て、若き芭蕉に多大な影響を与えた人である。実際、芭蕉は「宗因がいなければ、この俳諧は生まれなかった。宗因はこの道の中興なり」とまで評している。博物館の機関誌には「八代が育てた近世文芸のスター西山宗因」と銘打っているけれども、確かに。

もう一人、八代から出た俳人で有名なのが藁井文暁(1735～1816)。市内にある正教寺の住職だった。創作の芭蕉の臨終記「花屋日記」の著者として知られ、正岡子規は感動の涙をこぼし、芥川龍之介はこれを土台として「枯野抄」を著し、川端康成は「花屋日記は名作」と評している。かの小林一茶は文暁を訪ねて、三ヶ月も正教寺に逗留し、八代で人や自然と交わり作句や著作をなしている。このように、八代を訪れた著名な俳人も多い。芭蕉十哲の一人、各務支考は球磨川の渡しを越え、二見を通り佐敷へと赴いている。

ツクシイバラは、1918年、植物学者の前原勘次郎先生が球磨郡上村(現あさぎり町上地区)で発見されました。50年くらい前までは球磨川、川辺川の兩岸が桜色に染まったと言います。

分類学上、ノイバラ(学名:ロサ・ムルティフローラ)の変種とされていますが、実際の位置付けは不明。謎に包まれている点で、植物学者が注目しています。腺毛が目立ち、花の色は濃紅色から白色。花期は5月中旬から6月中旬。秋には赤い実が色づきます。このバラは、1. 花の観賞価値が高く、園芸目的の採取対象となりやすい。2. 土壌が肥沃で日照に恵まれた川岸を好むため、河川改修、護岸工事で自生地が失われやすい、という弱さゆえに、意識的に守らなければ簡単に絶滅と将来が危惧される植物です。

十数年前、河川工事と乱獲で絶滅の危機にありましたが、人吉在住の植物学者乙益正隆先生はじめ住民の手で保護され、現在、球磨川河川敷のいたるところで見られるようになり、数千株まで回復しました。球磨川のツクシイバラ群落は、面積においても個体数においても、おそらく最大のものと思われ、極めて貴重です。

1999年9月、「ひとよし森のホール」オープン間もないころ、画家流郷由起子さんからこの話を聞き、これがきっかけで、バラ研究者の御巫由紀さん(千葉県立中央博物館上席研究員)とも出会い、今年3月、「球磨川ツクシイバラの会」を発足しました。この会はツクシイバラを含めた球磨川流域の自然保護と地域づくりを活動の目的としています。ツクシイバラを守ることは、球磨川の豊かな自然の生命全てを守ることにつながる重要な活動だと思っています。

告知

8/24(木)

第2回現地見学会ご案内 佐敷城跡と芦北アマモ場

今回は、芦北地方の見学を予定しています。(詳細は、同封のチラシを参照して下さい)
佐敷城は、薩摩の島津氏、球磨の相良氏への備えとして加藤清正が築城したのですが、一国一城令により、取り壊されました。近年の発掘調査で、貴重な遺物やその勇姿が注目されています。

また、不知火海に残る数少ないアマモ場がある芦北町では、アマモ場再生の取り組みが行われていますが、今回は芦北高校の高校生の皆さんによる取り組みを見学いたします。どうぞ、ご参加下さい。

日程:平成18年8月24日(木)

集合:10:00~解散16:30(雨天決行)

集合場所:芦北町社会教育センター駐車場

芦北町大字佐敷206-1

TEL0966-82-2213(教育センター)



学会ロゴマーク募集中! 締切・9月30日

学会の象徴となるような、ロゴマークをお寄せください

TEL&FAX: 0964-26-2003

熊本県下益城郡城南町東阿高1136-1

原稿募集のお知らせ

不知火海・球磨川流域圏学会誌創刊号(第1巻第1号)

—みなさんの、地域への熱い想い、愛着を学会誌に載せてみませんか—

学会では、会則に定められた学会誌を発行するため、下記の要領で原稿を募集いたします。専門家・非専門家の枠を超え、学際的な情報を広く掲載し、紹介していきたいと考えていますので、よろしく願いいたします。

投稿規定

1. 原稿の種類

募集する原稿は、大きく以下の3つに分けられます。

①論文・研究ノート

広くみなさんから、論文を募集します。流域圏に少しでも関係するものであれば、どのような研究領域の論文でも構いません。論文とは、該当する専門分野の水準に照らして、原著論文として認められるもの、研究ノートとは、論文の短いものや、研究スタート段階での速報的レポートなどです。ご投稿いただいた原稿は、専門家に査読を依頼し、編集委員会で採否を決定させていただきます。

なお、本学会誌は高校生でも読めるものを目指していますので、専門用語には必ずわかりやすい解説をつけてください。

②調査資料、流域圏の知識、学習発表

愛する地元＝流域圏に関して、資料を集めている方はいませんか？ 積み重ねた知識を文章に残しませんか？ 論文の形には至らなくても、あなたの探究心は流域のみなさんにとっても価値あることに違いありません。

たとえば、歴史研究、自然観察記録、自然・歴史・社会などの調査報告、資料として未来に残したい情報などを、文章の形で集め、記録に残したいと思えます。活発な探究心と知識の共有は、流域の未来の礎となることでしょう！ 小中学生、高校生からのクラブ活動や自由研究の紹介も大歓迎です。

③流域いろいろ

研究に限らず、流域への想い・エッセイ、イベント情報など、流域のみなさんに知ってほしいこと・お伝えしたいことはこちらにどうぞ。有形無形の流域の宝物を探し出し、みなさんと分かち合いましょ！ 「こんな研究して欲しいなあ〜」という要望なども是非お寄せください。

2. 締切り

①の原稿：2006年9月30日

②③の原稿：2006年11月30日

3. 投稿方法

投稿を希望される方は、まず編集委員長に電話、FAX、メールでご相談ください。原稿の見本と「投稿整理票」をお送りします。

完成した原稿は、投稿整理票に必要事項を記入の上、原稿とともにメールまたは郵送で編集委員長宛にお送りください。手書き原稿も歓迎します。

4. 送り先、問い合わせ先

編集委員長 蔵治 光一郎

〒489-0031 愛知県瀬戸市五位塚町11-44

東京大学愛知演習林内

TEL 0561-82-2371 FAX 0561-85-2838

Email kuraji@uf.au-tokyo.ac.jp

以上

不知火海・球磨川流域圏学会は、私たちでつくる、私たちのための学会です。皆さんからの熱い想いが投稿されることを、編集委員会委員一同、お待ちしております！（編集委員会）

■不知火海・球磨川流域圏学会ニュースレター第1号

編集・発行/不知火海・球磨川流域圏学会 発行日/平成18年7月20日 Design/Studio Kinoko

■編集委員会

委員長/蔵治光一郎 委員/新井祥穂・住吉献太郎・高木正博・前田一洋・村上雅博

■ニュースレターに関するお問い合わせ

蔵治光一郎/ kuraji@uf.au-tokyo.ac.jp